紹　介

敦煌市博物館編

『敦煌文物』(Picture Album of Dunhuang Relics)

冨　谷　　至

昨年、二〇〇二年八月に私は、敦煌疏勒河流域、居延肩水候官遺址の現地調査に行った折り、敦煌市博物館にてこの圖版を得た。

一四〇頁からなるこの書は、「文物遺址」「文物圖版」「敦煌佛爺廟五涼時期墓葬發掘簡報」の三部からなり、圖版はすべて鮮明なカラー寫眞である。遺跡は懸泉遺址、凌胡燧、厭胡燧、千秋燧など漢代の烽燧のそれであり、懸泉遺址を除いては、小方盤城（スタイン遺址番號、T14）以西に點在する遺跡である。なお、厭胡燧とこの圖版が記すものは、確認されている最西端の烽燧であるT6d、凌胡燧とは、大煎都候官が置かれていたとも考えられているT6b遺跡である。疏勒河流域の一連の漢代烽燧の調査報告と鮮明な寫眞は二〇〇一年に出版され、我が國にも入ってきた甘肅省文物局編、岳邦湖・鍾聖祖著『疏勒河流域漢代長城考察報告』（文物出版社）が極めて詳細に傳える。

「文物圖版」は二〇世紀後半から今世紀二〇〇一年まで、敦煌周邊から出土、發見された青銅時代から清にいたる二〇〇近い文物を大きさ、出土地、出土年を付して掲載したもので、そこには一九五一年莫高窟から發見された『唐書地志』なども含まれる。

なかでも私の研究領域に深く關わり、無視できない出土文字資料は、四一枚の木簡である。四一枚のうち、二六枚は編綴された册書であり、一九九〇年四月に西湖清水溝墩から出土した漢代の曆、殘りの一五の木簡は、檢、楬、簿籍などを含んだそれぞれ個別の簡、一五枚はなべて一九九八年一〇月玉門關遺址から出土したと明記されている。記すところの玉門關とは、本書「文物遺址」の第二番目に「玉門關」として寫眞が掲載されている小方盤城（T14）のことであることは間違いない。

以下に私が釋讀した一五枚の木簡を記す。なお、釋讀は本書の圖版をもとになしたものだが、小さく不鮮明な文字もいくつかあり、また自信のもてない箇所もあるが、各木簡の大筋の內容は誤ってはいないであろう。

①玉門都尉府　陽　玉門廷高亭　高望候長

②玉門都尉府以亭行
　三月乙丑東門卒□以來

③■陽朔□□吏□
　出入關刺

④敦煌

⑤候長朱可／馬一匹駜牡齒八歲高五尺七寸
　半寸／毋繼

⑥☑□□錢萬二千二百冊／其二千一百六十
　田褒七月盡九月／二千一百六十倉嗇夫七
　月盡九月／除四人盡一時當還錢直七千九
　百廿

⑦其一人創工　二人作席　一人牧羊
　一人馬下　□人□千人　一人除府中糞

⑧出粟五石四斗　以食官大奴三人　積九十
　人ゝ六升

⑨出粟五十石三斗五升／其冊三石五斗　食
　馬五匹十一月乙亥盡癸卯廿九日積百冊五
　匹ゝ三斗／六石四斗五升　食馬一匹十一

月乙亥盡癸卯廿二日積廿二匹ㄨ三斗其七
日府丞之敦煌

⑩玉門關嗇夫效穀王光里公乘張敬年　卅七
移☐

⑪大煎都候令史羊敞士吏張長送卒還到東門
☐

⑫玉門言移隊長龐建缺

⑬倉曹言大煎都士吏杜宣責雕秩候長孫憲錢
九百五十寫移陽關都尉府　四月巳酉史☐
☐☐☐

⑭奏曹言左馮翊頻陽辟巳校士李譚有出關致
籍言大守府　五月辛亥守屬長奏封

⑮玉門移建始元年計吏卒乘亭陁鄣別簿都尉
鄣卒四人校竟寧元年計卒十八人承除少十
四人解何

以上、一五枚の簡は、玉門關、玉門都尉府との關係を物語る無視できない簡であること瞭然である。特に、②は、玉門都尉府に向けて出された檢であり、③の「出入關刺」とは、關所を出入した人閒（もしくは物品）の記錄（刺）である。また⑩には「玉門關嗇夫」という官職名も確認される。

これらの木簡はそれらが出土した遺址が玉門都尉府の官署が置かれていたところであり、かつそこは「玉門關」の遺址でもあったことを強く示唆するものと言ってよかろう。くりかえしになるが、一五枚はなべて一九九八年一〇月玉門關遺址から出土したと明記されている。本書の言う玉門關とは、T14遺址、小方盤城である。

漢代玉門關がどこに置かれていたのかに關しては、いくつかの說が出されており、特に近年は疏勒河流域の烽燧から多くの木簡が出土したことから、スタインから始まるT14遺址を玉門關との見方に疑問符が付けられてきた。かくいう私自身も『東洋史研究』四八―四（一九九〇年）で「漢代邊境の關所――玉門關の所在をめぐって」を發表し、T14＝玉門關遺址を否定し、むしろD21（馬圈灣）こそ漢代玉門關が置かれたところだと考えたのである。

拙論は、馬圈灣出土簡の全體がいまだ發表されてはいない段階のもので、一九九一年に『敦煌漢簡』（中華書局）が出版され、また今日に至る研究成果（『邊境出土木簡の研究』朋友書店　二〇〇三年、參考）を踏まえれば、全面改正をせねばならない。とりわけここに擧げた一五本を見れば、T14＝玉門都尉府＝玉門關は、これで決まったと言わねばならないだろう。

しかし……である。一五本の簡に關して腑に落ちないことがある。既に、大鷹著龍氏が「續編　木簡出土烽燧紀行」（金子卓義編集『書作』三八八、二〇〇三）において、寫眞を擧げて明快に指摘されているのだが、實は前頁に擧げた⑤「敦煌」、これは長方形の楬に屬する簡牘だが、馬圈灣出土簡1235（DMT:1）そのものである。となればこれはどういうことになるのだろう？

二〇〇二年六月　蘭州、甘肅省人民美術出版社
A4版　一四〇頁

Ryan Dunch,
Fuzhou Protestants and the Making of a Modern China 1887-1927

高嶋　航

中國においてキリスト敎はいかなる位置を占めていたのか。この問いには樣々な答